

企画展「被災地の文化財 双葉高校史学部のみち」について

山内 幹夫

1 はじめに 企画展開催の趣旨

福島県立双葉高等学校の史学部は、昭和20年代から活動を始め、浜通り地方の文化財調査、城下町調査、民話調査、空襲被害聞き取り調査などを精力的に進めてきた。その成果は、同校の文化祭や部誌において公開され、相双地区の地域史研究に大きな足跡を残した。しかし同校は、東日本大震災後に発生した原子力災害にともなう帰還困難区域に立地するため、生徒募集が停止され、平成29年3月31日をもって無期限の休校となった。

休校という事態を踏まえ、福島県文化財センター白河館では、「双葉高校史学部のみち」と題する企画展を開催することとした。

この企画展は、郷土の歴史を自らの手で掘り起こしてきた卒業生たちの活動を顕彰するとともに、長期的避難による郷土との分断を乗り越え、ふるさとの歴史と文化を未来につなぐあり方について考える機会を提供することを第一の目的とした。さらに、双葉高校卒業生のみならず、避難生活をしている双葉郡の人々が、郷土の歴史を改めて認識し、懐かしい風景や地名を思い出し、語り合う場を提供することを第二の目的とした。

展示期間は、平成29年12月16日(土)から平成30年3月4日(日)までを予定していたが、絶えることなく来場する双葉高校卒業生からの要望を受け、3月18日(日)まで会期を延長した。開会した94日間における来場者数は、5,445名を数えた。展示解説会は、1月28日(日)、2月18日(日)、3月4日(日)に実施した。また、双葉高校を卒業した研究者を講師に迎え、1月28日(日)に「双葉高校史学部の軌跡」(講師：吉野高光氏)、3月4日(日)に「被災地と文化財—ふるさとの記憶をつなぐ—」(講師：泉田邦彦氏)という関連講演会を開催した。

この企画展への反響は大きく、会期が終了した平成30年度においても、福島県立図書館、富岡町図書館、福島大学附属図書館、楡葉町コミュニティセンターの4か所で移動展を開催し、現在に至っている。



写真1 特別展示室入口の企画展看板



写真2 企画展の様子

2 企画展の内容

企画展「双葉高校史学部のみち」においては、双葉高校が残した資料の中から435点の展示品を抽出し、5つのコーナーに分けて陳列した。本章では、これら各コーナーにおける展示品と、その意味するところを書きとめておきたい。

(1) 双葉高校について

企画展の導入コーナーとして、双葉高校を紹介するコーナーを設けた。学校が発行した記念誌(創立60周年記念誌・70周年記念誌等)、生徒会誌、旧双葉中学校校舎上棟写真(大正時代)、校歌掲載パネルのほか、第62回全国高校野球選手権大会に双葉高校が出場した際の列車サインボード(行先標)などを展示した。



写真3 双葉高校についての展示

福島県立双葉高等学校は、大正12年に双葉郡新山町の地に県立双葉中学校として開校した。開校以来95年、「質実剛健」と「終始一貫」を校訓とし、双葉郡の教育の中核校として、多くの人材を輩出してきた。昭和3年制定の校歌は土井晩翠作詞・信時潔作曲によるもので、長きにわたり在校生や同窓生に親しまれてきた。天の恵み満ちる楡葉と標葉の古代に思いを馳せた歌詞は、学窓から梅檀の大樹として育たんとする若者の大志が伝わるような気宇壮大なものである。戦後の学制改革により県立双葉高等学校となってからも、双葉中学校以来の伝統は逞しく受け継がれてきた。

文武両道を尊ぶ校風は、武道・球技・陸上・体操などの体育系部活動、そして史学・文学・理科・家庭・音楽・演劇など文科系の部活動の活躍に象徴される。硬式野球部は、第55回・第62回・第76回甲子国大会に出場し、校歌が2度、甲子国球場に流れた。

学窓から巣立った幾多の人は、郷土の発展に大きく寄与したばかりでなく、福島県内はもとより、広く日本国内各地に羽ばたき、さまざまな分野で活躍している。

平成23年3月11日の東北地方太平洋沖地震にともなって発生した東京電力福島第一原子力発電所事故により、双葉高校も避難を余儀なくされた。以後、福島県内の各高校やいわき明星大学をサテライト協力校として学校が維持されてきたが、ふたば未来学園高等学校の開校にともない生徒の募集が停止され、平成29年3月31日をもって休校となった。

(2) 双葉高校史学部の活動

双葉高校史学部の活動を紹介するコーナーには、遺跡発掘調査時に作成された実測図とトレース図、文化財包蔵地カード、調査日誌、感想文、発掘調査記録写真、活動風景写真、部誌、調査用測量器材、収集考古資料を展示した。このコーナーは、さらに4つのブロックに分けら

れるので、各ブロックごとに展示内容を記すこととする。

①双葉高校史学部沿革

史学部の沿革を、写真・解説パネル・年表で紹介した。写真は、文化祭における展示風景や、他の学校との交流風景などを主に展示した。

戦後間もない昭和22年に社会科研究クラブが発足し、考古学の活動を開始したのが、後の史学部のスタートとなった。当初から相馬高校・相馬女子高校・原町高校・磐城高校・福島高校など他の高校と交流をもち、南相馬市真野古墳群やいわき市神谷作101号墳の発掘調査にも参加したほか、双葉郡内・相馬郡内における遺跡の表面調査を行っていた。

昭和35年には、部の名称を社会科研究クラブから史学部に変更している。部誌は、昭和32年に『社研1号』を発刊したのが始まりである。『社研』は4号までで、昭和37年発行誌からは、部名を史学部に変更したことにより『双葉史学』となった。さらに、昭和23年に創立25周年記念行事の文化祭で考古展を開催して以降、文化祭が開催された折には、部員が収集した考古資料や郷土史資料などを展示して、積極的に文化財の普及活動を行ってきた。

昭和20年代から50年代にかけての活躍はめざましく、遺跡の発掘調査や踏査、民話の聞き取り調査や相馬藩城下町調査、空襲被害の調査などの成果は『社研』や『双葉史学』に発表されている。このうち、双葉町沼の沢古墳群・寺内迫横穴墓群・清戸迫横穴墓群、浪江町塚の越遺跡などの発掘調査成果は、『福島県史第6巻』（昭和39年）にも掲載された。また、史学部員が行った遺跡の分布調査結果も、『福島県史』の遺跡地名表などに反映されている。数々の貴重な記録を残した史学部員の活動は、地域史研究に大きく貢献してきたのであった。

昭和44年に開催された文化祭のパンフレットに、当時顧問教諭であった相馬胤道氏が記した次の言葉がある。

「郷土を知ること、将来他の土地へ出てしまう人にも、ここに居残る人にとっても、自分には故郷があり、そして良く知っているという心の豊かさを増すことになりましょう。」

この言葉は、史学部の存在意義を端的に語ったものであり、はからずも今回の企画展のコンセプトに相通じるものであった。

②活動状況の記録

双葉高校史学部の活動状況を示す資料として、上記した写真類のほかに、部誌原稿、発掘調査参加時に作成された実測図、印刷用に作成された遺構トレース図、文化財包蔵地カード、発掘調査状況を記録した写真アルバム、測量器材等を展示した。さらに、企画展開幕後まもなく同校史学部卒業生の根本豊徳氏（二本松市文化財保護審議会委員）が来場し、同氏が持参した史学部のペナント（昭和40年代制作）を追加展示することができた。また、展示していた白黒写真が多く同氏の撮影によるものであることが判明し、撮影年次を特定することもできた。



写真4 双葉高校史学部についての展示

史学部は、上記した展示品のほかに、出土遺物実測図、記録写真をまとめた写真アルバム、スライド写真ファイル、ネガフィルム、調査日誌、遺跡踏査記録、埋蔵文化財発掘調査届出書案、古墳群調査一覧表、発掘調査報告書用の文字原稿・挿図原稿・写真図版原稿、『社研』や『双葉史学』の原稿、発掘調査に参加した感想文、文化祭パンフレット、研修旅行資料、文化財関係新聞記事スクラップブックなど、多くの活動記録を保有していた。



写真5 史学部の活動記録

最も古い記録としては、「昭和31年丈六古墳発掘記録」や「古墳見学参考資料昭和31、5、5日」がある。さらに、部員たちが使用した平板測量用アリダードや方位磁石、オートレベルなどの測量機器も残されていた。

古墳群の分布図や石室・石棺の実測図、横穴墓の実測図などを見ると、指導者にも恵まれ、高校生の水準をはるかに超える活動を行っていたことがわかる。写真には、発掘調査で汗を流して鍬をふるう様子や、遺構の測量風景、精査した遺構や遺物の出土状況、古墳の石室内堆積土のウオーターセパレーション実施風景などがあつた。さらに、合宿の様子、部員たちの表情など、青春を感じさせるシーンも残されている。また、文化祭、他校との交流、楽しい研修旅行の様子など、多岐にわたる史学部の記録が残されていた。

③活動成果の記録

活動の成果をまとめた部誌(「社研」・「双葉史学第5号～第13号」合本、「双葉史学第14号」～「双葉史学第16号」、「歴訪第11号」・「歴訪第15号」・「歴訪第16号」など)のほか、他校から寄贈された部誌を展示した。さらに、「社研」・「双葉史学」の紙面を拡大したパネルを複数展示した。

昭和22年に発足した社会科研究クラブは、郷土の遺跡や歴史の調査を重ね、その成果が蓄積されてきた昭和32年、初めての部誌『社研第1号』を刊行した。以後、『社研』は4号まで続くが、いずれも謄写版印刷(ガリ版刷り)ながら、「晩香錦織先生年譜」や「大堀焼の研究」、「郷土の伝説」、「特集 相馬藩における城下町と武家屋敷の研究」など、高校生としては高度な内容の論文が掲載されている。

昭和35年度に社会科研究クラブから史学部と名称を改め、昭和37年2月に刊行された部誌は『双葉史学』と命名された。ただし、号数番号は『社研』から継続させたため、『双葉史学』は第5号からのスタートとなった。印刷は謄写版印刷から印刷所でのオフセット印刷に変わ



写真6 史学部の部誌

り、内容も、遺跡発掘調査報告や発掘調査体験記、遺跡の踏査で収集した資料の紹介など、考古学的内容が増加してきた。号数が新しくなると、考古資料の実測図や拓本、写真を組み込んで印刷できるようになった。内容も考古学記事ばかりでなく、民話伝説や空襲被害調査など、郷土の近代史や民俗にも及ぶようになった。

部員数は、最多で130名にも及んだ時期があった。会期中に来場した卒業生の述懐によると、自治体の発掘調査に参加して得た部員のアルバイト代を、『双葉史学』の印刷費に充当することもあったという。彼らは、考古資料の実測図やトレース図の作成も行い、これを『双葉史学』に掲載した。その実測図は、大学の考古学専攻生に比肩できる水準のものであった。

昭和56年からは、史学部の第二機関紙的な冊子として『歴訪』が刊行された。学術的な内容ばかりでなく、歴史を学ぶ楽しさを伝えるものとなっている。

史学部は、双葉高校の部誌ばかりでなく、福島県立原町高校・浪江高校・福島高校・石川高校・磐城高校・湯本高校の郷土史研究クラブ・社会研究クラブ・史学部の部誌も保有していた。往時の活発な交流活動を物語っている。

④収集した考古資料

縄文土器、縄文時代の石器と骨角器、弥生時代の石器、土師器、須恵器、古瓦など、史学部が保管していた考古資料を多数展示した。考古資料のなかには、いわき市修生院貝塚(寺脇貝塚)や御代貝塚などから採集された貝殻や骨角器のほか、福島第一原子力発電所敷地内に所在する大熊町長者原遺跡のように二度と立ち入ることができないであろう遺跡から出土した須恵器、寺沢仲禅寺遺跡出土の布目瓦のように古代末から中世にかけての寺院跡を推定させる貴重な資料も含まれている。

収集資料には、出土場所や採集・寄贈の年月日が墨書されている例が多い。最も古い記録は、ロクロ土師器杯底部内面のラベルに記された「第一學年乙組」であるが、これは戦前の双葉中学校時代のもので、社会科研究クラブ発足以前の資料である。

「標葉町新山 石熊」と書かれた土師器甕は、昭和25年から31年にかけて新山町と長塚村が合併して「標葉町」という町名が制定されていた時代の収集資料である。また、「双葉町上手岡」と墨書された磨製石斧は、上手岡を含む上岡地区が「双葉町」に属していた昭和25年から30年にかけての収集資料である。「苧野村」と墨書された打製石斧は、旧苧野村が昭和31年に浪江町に合併される前の収集資料である。このように、考古資料に記された墨書は、町名の変化を反映した貴重な記録であった。この点に着目し、資料に記された墨書の拡大写真を集成した解説パネルも展示した。

資料に墨書された地名は、いわき市から相馬郡新地町にかけての地名が記されており、史学部員の活動範囲の広範さを知ることができる。また、住民から寄贈を受けた資料も多く、史学



写真7 史学部が収集した考古資料

部の存在が地元の人々に広く知られていたことの証と言える。とりわけ、いわき市の貝塚から出土した骨角器などは、昭和30年代に採集した収集家が史学部に寄贈したことが明らかとなっており、当時の史学部が、資料の寄贈先として信頼されていたことを知ることができる。

（3）双葉高校史学部が参加した主な発掘調査

史学部員たちは、昭和20年代から、地元双葉町をはじめとして、北は南相馬市から南は富岡町にかけての遺跡発掘調査に参加している。このコーナーでは、文化庁被災ミュージアム復興事業により福島県文化財センター白河館において仮保管している考古資料のなかから、史学部員たちが調査に参加した遺跡の出土遺物を、各自治体の許可を得た上で展示した。

①富岡町の遺跡

・小浜代遺跡

昭和44年から46年にかけて発掘調査が行われた。いずれの調査にも史学部員が参加している。奈良時代の掘立柱建物跡や埋込基壇、瓦溜などの遺構が確認され、多くの瓦が出土した。他に、奈良三彩陶器片や須恵質猿面土製品、仏具の鉄鉢に似た椀形須恵器などが出土している。豪族の邸宅か官人の役所で、小規模な仏寺建築も存在したことが推定されている。

・真壁城跡

昭和50年・51年・56年・57年に発掘調査が行われた。このうち、史学部員は、昭和50年の第1次調査に合宿をしながら参加した。1次・2次調査でB地区、3次調査でA地区、4次調査でC地区を発掘した。C地区からは古墳時代と平安時代の集落跡、A地区からC地区にかけて室町時代の城館跡が確認された。

富岡町のコーナーでは、発掘された考古資料のほかに、小浜代遺跡や真壁城跡の発掘調査風景や、部員たちの休憩時の写真なども展示した。そのなかには、合宿所となった富岡町文化センターで部員たちが笑顔で入浴しているカットが含まれていた。浴槽の中央に写っていたのは現双葉町教育長の館下明夫氏であった。余談であるが、当時大学4年生であった筆者も、彼らとともに合宿しながら、真壁城跡の発掘調査に参加していた。当時の部員たちの顔や、合宿時の会話のひとつひとつを、今もなお鮮明に記憶している。

②大熊町の遺跡

・道平遺跡

昭和55年に発掘調査が行われ、史学部からも有志が参加している。縄文時代後期～晩期の竪穴住居跡や土器埋設遺構、石組遺構などが確認された。遺物包含層からは、縄文時代後期～晩期の土器、土偶やスタンプ状土製品・土錘・土製円盤などさまざまな土製品、石棒・石刀などの石製品、各種石器と、数多くの遺物が出土している。

・大平遺跡

大平遺跡は、かつて故竹島国基氏により縄文時代早期の沈線文土器が採集され、「大平式土器」の標識遺跡となった遺跡である。その後、史学部員が縄文時代早期の沈線文土器を採集し、その拓本と断面図を作成し、平成2年の『双葉史学』第16号において「双葉郡大熊町大平遺跡出

土の考古資料」と題して報告している。

大熊町のコーナーでは、発掘された考古資料と発掘調査写真パネルを展示したほか、『双葉史学』第16号誌上の大平遺跡出土土器拓影図を拡大して展示した。

③双葉町の遺跡

・沼の沢古墳群

昭和25年に7号墳、同44年に1号墳、同45年～46年に5号墳、同56年に3号墳の発掘調査が行われた。史学部員も、合宿をしながらこの調査に参加している。昭和38年に史学部が測量調査を行った段階では、前方後円墳1基、円墳5基が存在していた。

・清戸迫横穴墓群

昭和42年に発掘調査が行われ、76号横穴からは渦巻文や武人・動物を描いた朱彩の壁画が確認され、後に国指定史跡に指定された。さらに昭和58年～59年に発掘調査したA群の7号横穴からは線刻画が確認された。

・郡山五番遺跡

昭和52年から54年にかけて発掘調査が行われた。史学部員も合宿をしながら参加している。官衙風の掘立柱建物跡群が確認され、瓦が数多く出土した。軒丸瓦は単弁蓮華文瓦で、軒平瓦には偏行唐草文や波状文・重弧文が認められている。標葉郡衙跡と推定されている。

双葉町のコーナーでは、発掘された考古資料の他に、清戸迫横穴墓群・沼の沢古墳群・郡山五番遺跡の発掘調査記録写真パネルを展示した。特に清戸迫横穴墓では、装飾壁画が発見された直後に双葉高校生が現地を見学している白黒写真が撮影されており、考古学史的にも貴重である。なお、装飾壁画が発見された当初、地元の写真館が町からの依頼を受けて壁画を撮影したというエピソードを、来場者から聞き取ることができた。



写真8 史学部員が参加した発掘調査の資料

（4）城下町調査・民話聞き取り調査・空襲被害調査

部誌『社研』誌上に掲載された城下町調査報告、昔話採集関係資料、空襲被害調査票、空襲被害調査を報じた新聞切抜き（額縁入り）のほか、昔話の取材・記録風景写真、空襲被害取材風景写真等を展示した。

昭和34年、史学部は、合宿をしながら相馬藩における城下町と武家屋敷の調査を行っている。城下町等の調査成果については、『社研』第四号（相馬藩特集号）において、「相馬藩における城下町と武家屋敷の研究」として報告されている。

史学部は、昭和40年に「磐城民俗研究会」に参加し、昭和46年には福島県民俗資料緊急調査に参加するなど、近世史や民俗学の分野の調査にも力を入れている。

民話調査については、相馬市を中心とする地域において昭和40年に実施したのを皮切りに、昭和43年には双葉郡を中心とした地域でも実施している。現地で聞き取りを行った内容をデー

ブに録音し、昭和44年から45年にかけて録音内容の文字化作業を行った。この成果は、『双葉史学』第8号に「特集相馬の民話 佐藤キミヨさんの話」として掲載されている。

平成元年には相馬市・原町市・相馬郡・双葉郡内各町村の空襲被害調査を行い、その成果は文化祭に展示されたほか、『双葉史学』第16号に「相双地区空襲被害調査報告」としてまとめられた。相双地区全体の空襲被害調査を行ったのは初めてのことで、複数の新聞で紹介された画期的な成果であった。



写真9 空襲被害調査関係資料

（5）化石・岩石・鉱物・植物標本

双葉高校は、史学部関連の資料のほかに、化石・岩石・植物標本も数多く保有していた。このコーナーでは、化石・岩石標本と押し葉標本を展示した。

化石は、植物・貝・魚類・鯨骨で、ほとんどが新生代新第三紀のものである。産地は南相馬市信田沢、浪江町小野田・同町丈六、双葉町細谷海岸、楢葉町井出字立石、広野町二ツ沼などと記されている。岩石・鉱物には、地元産だけでなく、購入した全国各地産の標本も含まれている。化石・岩石・鉱物標本は、同校の地学部が収集したものと考えられる。

段ボール箱で5箱、数百点に及ぶ植物標本は、すべて押し葉標本で、草本類・木本類（低木）・シダなどの陸上植物のほか、海藻類も含むものであった。その大部分は、戦前の旧制双葉中学校時代に製作されたもので、最も古いものは大正年間の製作であることも判明した。標本の中には、夏休みの宿題として提出されたものもあったが、残りも良く、製作手順がきちんと守られていた。腊葉標本技術にすぐれた教員が在職し、的確に指導していたことを示すものと考えられる。戦前のすぐれた植物標本を、劣化させずに保存し続けてきたことは、双葉高校の功績と言えるものである。

3 来場者の反応

史学部は、調査活動の記録写真のほかに、研修旅行、合宿風景、史学部室内の様子、発掘現場の休憩時間の様子など、当時の部員の表情を撮影した写真を数多く保存し続けてきた。この企画展では、そのような写真群を拡大プリントした「思い出の写真」を展示室中央に配置した。そして、机の上に鉛筆と付箋紙を備え、「写真が撮影された年代や場所などがおわかりの方は、付箋紙にご記入の上、その脇に貼っていただければ幸いです」と表示した。

写真パネルに付箋紙を備えた効果は抜群であった。来場する卒業生たちは、恩師や同級生に久しぶりに会えたような表情で写真に見入り、付箋紙に記入していった。また、SNSなどの媒体を介した情報の拡散が進み、双葉高校関係者の来場が途切れず、写真パネルに貼付される付箋紙もどんどん増えていった。付箋紙に記される内容は、撮影場所や撮影年次ばかりでなく、

写っている部員名や撮影者名にまで及んだ。

また、展示室の一角にアンケート用紙と自由帳を設置したところ、多くの来場者から感想のコメントが寄せられ、その内容についても会期中に公開を図った。

アンケートの回答の中に、「今回の展示が、故郷を離れて暮らしている方々に、故郷を思い出すきっかけになると良いと思います」というコメントがあった。これは、企画展に来場した多くの方々の気持ちを代弁したものであつたと思われる。自由帳には、史学部員の活動への

賛賞、郷土の資料に出会えたことへの感激、史学部員として活動していた頃への懐かしさ、双葉高校が休校になったことへの寂しさ、企画展開催への感謝など、あふれる思いがつづられていた。ここに、その一部を紹介する。

「昭和46年双葉高校入学で史学部中に在籍しました。発掘にも参加し、土器片などを見つけて喜んだ思い出が残っています。今回の企画展は、ぜひ見たいと思い、やって来ました。なつかしく、今は亡くなられた恩師の写真に涙が出そうでした。休校となってしまっただけに、とても貴重な企画展でした。」

「とてもなつかしく見学しました。いまは亡き友との日々を思い出しました。」

「まだ戻れない双葉町の歴史を展示していただき感謝しております。また見に来たいです。」

「ぜひ、またお願いします。母校を感じさせてくれる場所が少ないので。」

「S 53～55年度まで史学部中に居ました。当時、合宿として発掘していた時の写真などや、友人たちの写真、自分たちが編さんした『双葉史学』など、なつかしく拝見させていただき、当時を思い出しました。できることなら双高が再開し、又、学生たちが自分達と同じ様な思い出をつくってくれることを期待しています。」



写真10 思い出の写真コーナー（来館された方に思い出を付箋に記して貼り付けていただいた）



写真11 アンケートに寄せられた来館者の思いを集めたパネル

「S 46年度卒業生です。双葉町出身です。なつかしくて来ました。知り合いの後輩の写真があり、嬉しかったです。双葉高校が休校となったのは残念です。忘れないでほしいです。」
「昭和50年度卒業生です。担任であった鎌田先生やいとこの写真がありとてもなつかしかったです。5年後には双葉町で展示されることを願っております。」

「久しぶりに双高の校舎に入ったような気がして帰りがたくなりました。自分のアルバムや思い出を持ち出すことができず、ここで同級生の姿(写真で)なども見るのができ、本当にうれしかった。いつか、帰りたい場所です。」

「(前略)今回この様に、活動の歴史を振り返り、すばらしい史学部だったと感じることができました。恩師の名前等がでてきて懐かしく、双葉地方の地名が記されているところには、まるで、双葉町の歴史民俗資料館にいるような錯覚さえ感じました。歴史ある双葉高校の卒業生として誇りを胸に、この震災を乗り越え、前向きに生きていこうと思います。」

※ 思い出の場所 一福屋のラーメン・清寿堂・本やのおじさん・小西商店 等々

「母校は休校になってしまいましたが、双高は永遠に不滅です。何十年後の母校復活を祈りつつ余生を送っていきます。ありがとうございました。」

以上のようなコメントを読むと、東日本大震災と原子力災害による長期避難、そして双葉高校の休校、故郷と母校への思いが断ち切れようとしている今だからこそ、多くの来場者は、この企画展から、母校、そして郷土の歴史と文化に対する思いを再び強くしたのではないかと考える。

4 まとめ

本企画展は、開幕から時間が経過するにつれて、日に日に内容が深化していくという稀有な展示であった。来場した史学部卒業生の方々が、展示品や「思い出の写真」の情報を付箋紙に記入して貼付し、企画展情報を双葉高校ゆかりの人々に広報し、自宅に保管していた史学部関係資料を持参して展示品を追加し、展示品にまつわるエピソードを同行者や白河館職員に解説したりしながら、企画展への注目度を高めていった。あたかも、双葉高校卒業生と白河館との協働により、展示内容を更新しているかのような3か月間であった。

来場者アンケートでは、「又やってほしいです。」「このまま、これがどこかに保存され、見たい時にみえるようなことになればもっといいのでは。」などの意見も寄せられた。そこからは、郷土の歴史と文化を未来につなぐことへの願いを感じ取ることができる。

白河館は、これまでも「救出された双葉郡の文化財」Ⅰ～Ⅲ、「発掘された大堀相馬焼」、「よみがえる文化財―震災からの救出活動と再生への取り組み―」、「震災遺産と文化財」、「編む・組む・削る―植物利用の技術史―」などの「ふくしま復興展」シリーズを続けてきた。ただ、今回の「双葉高校史学部のみち」ほど、来場者と白河館の一体感が高まった企画展はなかった。文化財を守るのは人であり、その意義を伝えるのも人である。郷土のみちを人から人へつないでいくことの大切さを再認識させられた企画展であった。